

再び恩師に仕えて

登 根 友 枝

私は六十年間、故武田ミキ先生に直接御指導仰いだ教え子でございます。

今は亡き先生の、若かりし日の教育に対する尽きぬ情熱と、一人ひとりの教え子に対する厳しい中にも愛情に満ちた眼差しを思い浮かべながら、過ぎし日の思い出を綴らさせていただきます。

私がこの「淳風寮」に御縁ありまして来させていただきましたのは、昭和六十一年四月一日でございました。当時の先生は、豊かな夢をお持ちでした。「今からの五年で、この学園に五つの建物を建設するので、それまで是非やって欲しい」という熱いお誘いに不安を胸一杯にしながら舎監を勤めさせていただきました。

「五年たてば私は九十才になる。それまで生きていられるだろうか……」のお言葉に「年齢を重ねるとだれもみな同じ年でございます。どちらが先に逝くか、分からないのが人生でございます。」と申し上げたのが、つい昨日のようでございます。

先生から、寮こそ実践教育の場であると教示され、仕事につきました。

ささやかではございますが、わが子を育て嫁と共に過ごし、学生と同じ年の孫娘を育て、歳を経た者にとりま

四、ミキ先生とともに生きて

しては、寮生の姿が見えすぎ、気になることが山積する大変な毎日でございます。

そうした中にも、嬉しいこともありました。それは、卒業生の皆様が毎月のように先生の許に御機嫌伺いにお見えになられることでございます。寮に居る私に、先生の弾んだお声が電話の向こうでひびきます。急いで参りますと、先生はそれはそれはお嬉しそうなお顔で「早く!!早く!!」と招かれます。先生を中心に懐かしさと嬉しさで話に花が咲き、あの厳格な先生も、つい時間のたつのをお忘れのようでございます。

卒業生の皆様がお帰りの時、「先生を頼みますよ、気をつけてね。」と言われるお言葉に、先生を思われる皆様のお気持が痛いほど私の身にしみたものがございます。

このようにして平穏な日々が続いておりましたのに、平成四年三月中旬、先生はお風邪をこじらされ、安佐市民病院に入院なさいました。それも九月には無事退院なされ、御自宅で御家族や、付き添いのお方の手厚い御看護のもとで過ごされるようになり、私にとりましても嬉しい日々でございます。

ところが昨年十一月ごろのことでございます。少々お元気がないなあと思うことがございました。また、無性にお淋しがられるようになられました。時々、小学校のころの歌をうたうよう所望なさいます。私は声を張り上げて「我は海の子」や「秋の夕日」等々うたいますと、先生も私の歌に合わせて唇を動かされます。私はそれが嬉しくてよく大声でうたいました。また、先生の御気分の良い時には、「歎異抄」の一節をお聞かせ致しておりました。「弥陀の誓願不思議に助けられ、往生をとげるのだと信じ、念仏申そうと思いたつ心がおこった時、その時すでにその人は、撰取不捨のご利益にあずかっているのである。」この一節に先生は、「ウン、ウン、ワカッタ。」と申されます。枕元の御仏壇で「正信偈」や「御文章」をおあげしますと、ベットの中でお手を合わされる先生のお姿

がありました。

あれはこの冬でも、本格的な冷えを感じさせる十二月二十六日の夜でございました。

先生はいつも喘息で、息づかいがお苦しそうでございました。校医の桑原先生のお手当て次第に落ち着かれ、静かにおやすみになりました。私は何か後髪を引かれる思いで、そおと寮に帰りましたのが、九時半ごろでございました。

翌朝、けたたましい電話のベルが鳴りました。受話器を置き、精一杯走って参りました。でも一足遅うございました。

私はまだ暖かい先生のお手を握り、耳元で声を限りに呼びました。「先生、先生」と十回も二十回も呼びました。その時お口元が少しほころび、かすかに微笑ほほえまれたような気がいたしました。思いなしてでしょうか、真でございましょうか、悲しい悲しいお別れでございました。

先生のお顔は仏様のような、それはそれはお優しくお美しいお顔でございました。

先生がお亡くなりになって、早くも二十日が過ぎようとしています。私は今、身も心も力が抜けて、雲の上を歩いているような心地でございます。どうかすると地にくずれおちそうになり、我が心に鞭打つように努めましても、思うようにならない日々でございます。

今まで、私は先生を元気づけて差し上げたつもりでございましたが、それは大きな大きな間違いでございました。先生は何もなさらなくても、先生がいらっしゃるだけで、私どもの心の支えでございました。

杖になっていると思っていた私が反対に杖になっていたのだということが、今になって分かって参りました。こ

四、ミキ先生とともに生きて

んなにまでも、私の心に深く入っていらつしやるとは思いませんでした。先生は偉大な、偉大なお方でございました。何時までも沈んでばかりおりますと、先生にお叱りを受けそうでございます。

これからは精一杯頑張つて、先生の御冥福をお祈りいたし、御生前の御指導と、数限りない思い出を道づれに、いよいよ残り少なくなりました余生を、ささやかに静かに過ごさせていただこうと思ひます。

合掌